

《特別連載》

家族面接の実践から里親家族支援を考える

その2 座談会ダイジェスト

大谷 多加志

早樫 一男

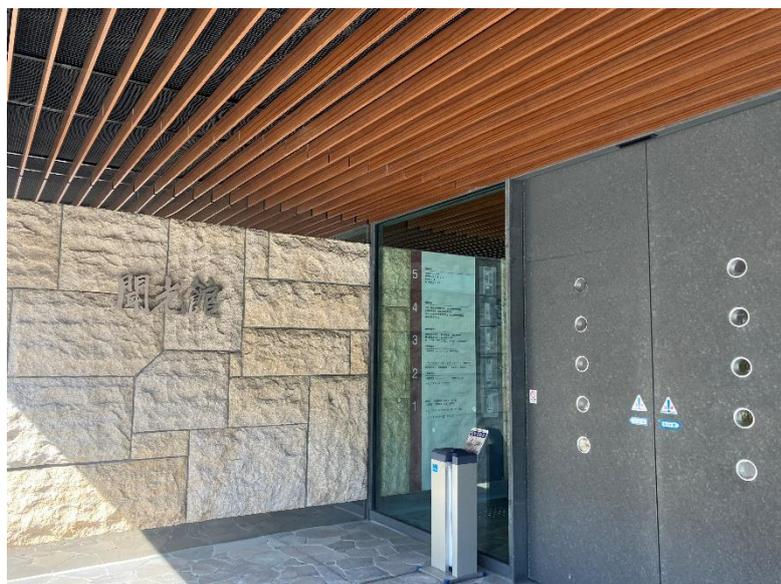
坂口 伊都

千葉 晃央

はじめに

前号からスタートした「家族面接の実践から里親家族支援を考える」ですが、この連載は昨年9月に行われた座談会をきっかけに始まりました。座談会の参加者はマガジン執筆者でもある、早樫さん、千葉さん、坂口さんで、いずれも社会的養護の現場との関わりがある、家族支援のスペシャリストであるお三方です。座談会の発起人は坂口さんですが、里親の現場に「家族理解」と「家族支援」の視点が必要であるという共通認識のもと、座談会が企画され、門外漢の立場から質問や進行を担う役割として大谷が同席することになりました。

参加した実感として、学ぶところが非常に多く、里親や社会的養護に関わる人だけでなく、これまでこの領域に関わりのなかった人にも広く知って頂きたいと思いました。今回は、このテーマへの導入として、里親制度を巡る現状を概観し、次に座談会の内容を要約して紹介します。



座談会会場
京都光華女子大学聞光館

里親の今

本題に入る前に、まず里親をめぐる現状を確認しておきましょう。平成 28 (2016) 年の民法改正を受けて、平成 29 年に厚生労働省の専門部会から「新しい社会的養育ビジョン」が示されました。社会的養護には、児童養護施設や乳児院などにおける「施設養育」と、里親やファミリーホームにおける「家庭養育」がありますが、このビジョンの中では「家庭養育」の推進が強く打ち出されていました。

諸外国と比べて日本は施設養育の割合が高いという状況があるため、それを低減させたいという背景があったものと思われませんが、平成 27 (2015) 年度末の里親委託率が 17.5% に留まっているにも関わらず、5-7 年以内に里親委託率 50-75% を目指すと謳われており (厚生労働省, 2017)、よく言えば「大胆かつ積極的な」目標設定、悪く言えばこれまで里親委託が進まなかった現状を踏まえていない「絵に描いた餅」のような目標設定と言えるかもしれません。

里親委託が推進される中、懸念されているのが「里親不調」の増加です。「里親不調」という表現もどうかと思いますが、具体的には里親と子どもの関係悪化によって、里親委託の解除に至ったケースのことを指し、2020 年度に里親委託解除になったケースのうち 18% (275 人) が里親不調による委託解除だったとされています (読売新聞デジタル 2022 年 2 月 24 日)。厚生労働省の HP によると、里親やファミリーホームで養育されている子どもは 2020 年度末で約 7700 名ですが、毎年数百人単位の里親不調が生じていることは、決して軽視はできないでしょう。実際、2021 年には全国里親会が厚生労働省に対して、里親不調が生じないように対策の強化を求める要望書を提出しています。

しかしながら、そのためには里親をどのように支援したらよいのでしょうか。現状で十分な知見や方向性が示されているとは言えないように思います。里親という実践自体がまだ少数ということもありますし、フォスタリングや里親支援という考え方もまだ日が浅く、蓄積が少ないのかもしれません。「里親家族支援に、家族理解と家族支援の視点を」というこの企画の趣旨は、この部分に光を当てられる可能性を秘めているように思います。ここからは座談会の内容について順に紹介します。



【座談会】

話者紹介

早樫一男：児童養護施設/乳児院「京都大和の家」統括施設長。京都府の児童相談所等で長年心理職として勤務し、同志社大学心理学科教授を経て、2014年より現職。対人援助学マガジンでは「家族造形法の深度」「日本のジェノグラム」を連載。

坂口伊都：家族関係支援・相談支援 憩都（いと）主宰。大学教員、NPO法人チャイルド・リソース・センター、スクールソーシャルワーカー等の経験を持ち、現在はフリーランスとして家族支援や専門職養成に関わる。対人援助学マガジンでは、自身の里親体験をもとにした「養育里親 ーもうひとつの家族ー」などを連載。

千葉晃央：京都光華女子大学健康科学部医療福祉学科社会福祉専攻講師。1999年から京都市国際社会福祉センター^{*1}で家族療法を学び実践。同時に障害福祉領域の現場で長年の実践を行う。2020年から2021年に里親支援に携わり、立命館大学が行うフォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座の運営にも関わる。

家庭に子どもを迎えるということ

大谷：今回は坂口さんの持ち込み企画ということですので、まず、坂口さんから企画趣旨をお願いします。

坂口：養育里親を始めることは、「家族の中に子どもが入ること」で、それは思っていた以上に難しかったです。いったん家族全体のバランスが崩れて、里子を含めて**家族のバランスを作り直していく**ことになりました。里子が思春期になった時期に、家を飛び出してしまうというようなことが増えて、この家庭だけで里子を守ることができな



いと感じ、離れることになりました。「ずっと一緒に暮らし続ける方法はなかったのか」、「たとえ離れるにしても里子の負担を少なくするような方法はなかったのか」という思いは、やはり残っています。これまで家族面接や親子関係支援に関わってきて、さらに最近になって本当に短い期間ですけど児童養護施設職員をさせてもらった中で見てきたものがあって、「里親家族支援」について具体的な提案をしたくて、どう思いますかと早樫さんと千葉さんに投げたというのが始まりです。

大谷：なるほど。早樫さん、千葉さんから、それぞれ思われたことを話して頂けたらと思いますが、どうでしょう。

早樫：里親家庭、あるいは家族の成長をどう考えるかという発想が対談の前提にあります。

乳児期の里子を受け入れる場合を除外して、坂口さんの経験のように、ある一定程度の年齢に達した子どもを里親家庭で受けて、そこに既に子育て中の実子がいるという場合、受け入れた里親家庭の家族構造がどんな風に、いかに変化していくか、そこにどんな困難があるかということのを誰も言ってこなかったし、触れてこなかったということを改めて思いました。

これは離婚、再婚によって、義理の関係が生じる家族とも違う。坂口さんが言った「家族のバランスが崩れる」というのは、中途養育の里親家庭をケアしていくためには、とっっても大事な視点だなとまず思いました。

それから、もう一つは「家族のバランスが崩れた」という視点自体を、里親支援の人たちは持っているのだろうか、ということも思いました。

大谷：ここまでのお話を踏まえて、千葉さんからもお願いします。

千葉：私は里親支援に1年関わり、それから立命館大学が行うフォスタリング・ソーシャルワークの講座^{※2}に関わって今が3年目です。里親を支援している人たちは、**家族システム**とか**家族の構造理論**^{※3}のような学びはしてきていない人が多いと感じています。

とにかく、業務が大変なんですよね。里親家族のことを扱って、里子のことを扱って、実家族のことを扱って、それぞれの家族のきょうだいや祖父母も扱って…。それ以外にも、法律的手続きも考える必要があって、業務の中でこれほどまで広い役割が求められる援助職もあまりいないかなと感じます。一方で、大きな武器となる家族システムの視点は持たずに向かっている方も多くいます。

その時は『夫婦で話されたらどうですか？』と一瞬支援者が離れて、何を話すかきいてみたらいいなあとか、おじいちゃんおばあちゃんとは距離を置いて（境界を引いて）…というようにするといいかもなあと思うこともあります。

支援がうまくいっているケースでは、家族の構造理論の視点でみるとうまくいっている理由が納得できることもあるんです。親世代と子世代の境界は引いて、里親さんが実の親に対して、同じ親世代として広いサブシステムみたいなものを作っていることもあります。里親さんが実親さんのところに里子と一緒にいくともききません。同じ立場の経験がある親同士としてサポートできているケースもある。そういうことが見えてくるのは構造理論のおかげですし、役に立つと思っています。少し意識するだけでもだいぶ変わるんじゃないかなあ。

大谷：皆さんの話を聞いていると里親支援の中に「家族システム」や「家族の構造」の視点を持って取り組むということは現状では少なく、構造理論の観点からみてうまく対応しているケースでも意識的にそうしているわけではないので、知見の蓄積にはつながらなくて…という状況なのかなと思いました。

家族に新しいメンバーを受け入れるというのは、家族の構造をもう一度作り直すことなのかなと思いました。マガジン編集長の団先生が、結婚は異文化交流だとおっ

しゃっていたことが思い浮かびました。異なる文化を持つ人が出会って、新しい二人でのやり方や文化を作っていくような再構築の過程だと言われていたのを、話を聞きながら思い出しました。それが上手くいかなくて離婚する家庭もあるわけだから、それが大変なことだということがよくわかりますね。

家族の再構築が里親家庭に与える影響

早樫：子育てを既に経験した里親さんの場合、「子育ての器」が決まっていると思う。器が決まっているから、中途養育の場合は、その器に里子が適応することを求めることになる。実子の子育てが終わった里親家庭に里子への対応の変化を求めるのは難しいかもしれない。施設では子どもたちの行動を通して自分たちの関わりを振り返ることもあるし、支援職として専門性を求められるから、対応の変化につながることもある。

坂口さんの場合、里子の言動によって、子育て中の器がとっても揺れて大変だったという側面があると思う。

施設なら施設、家庭なら家庭のルールがある。児童養護施設でも生活を継続することが難しく、結果的に子どもが他の施設に変わっていくこともある。施設職員にとっても後悔とか、振り返りとか、傷つきを伴うものになる。支援の継続が難しくなった場合、同じような心情が里親家庭でもあるのではないかと思っている。だからこそ、中途養育の支援をどうやっていくかということに私自身が惹きつけられたところがあります。

坂口：最初、長男が珍しく頑張ったんですね。お兄ちゃんなりに。でもそこに里子がうまく乗れないというか、甘えられない、仲良しの感じが出せない、となった時にたぶん長男は傷ついたのだと思います。傷ついて、里子から離れていったという感触がありました。本人に聞いたら「そんなの覚えてないわ」と言われそうですが、側で見て感じていた。

娘の方は、本当に家族の界面活性剤のようでした。家族を調整する役割、**里子にも里親にも救世主的な役割**を担っていた。周りの大人達も里親に聞くよりも聞きやすいから、娘に「里子さん、どう？」と質問され、娘はしんどかった。その場では元気そうにしていたのですが、何年か後に里姉の立場で話してみるという機会をいただいて、外で打ち合わせをした時にボロボロと泣き出して、しんどかったのだなということが後からわかりました。

千葉：いわゆる「里親不調」という状況は、里親さんは本当に傷つきます。どんな**大ベテランの里親さんでも「傷つく」という言葉**で語っていたり、しばらく何もできない時期があったと聞いたりもします。「傷つきとか落ち込み」と「何もできない時期がある」みたいな話は里親さんにはセットになっていると感じています。必要な支えがない

からそういうことになるのかなと。そこに家族に関する知識とか、サポート、繋がりができて、「里親やっても大丈夫かな」と思う人が増えることにつながっていったらいいと思っています。

早樫：今、千葉さんが言っていたように、その部分の支援が必要という発想も弱いのではないかと思った。里親さんが、何らかの事情で里子の養育ができなくなった時、実は里親さんもとっても傷ついたり、落ち込んだりしている。そこへのケアが必要だという発想がないのではないかと思った。どうですか？

坂口：それこそ「次（の里子さん）どうですか？」とは尋ねられましたけど、ケアと言われるとピンとこないですね。

千葉：里親の普及を推進するという方針があるので、デメリットな要素はあまり取り上げられていないように思います。社会的な意義！やりがいがある！とか良い部分は良く取り上げられます。バランスの悪い情報提供のように思います。

家族の発達段階と親のエンパワメント

大谷：さっき早樫さんがおっしゃった「家族の発達段階」という発想が全然なかったので、そういう考え方があるのかと思いました。その辺りの「家族の発達段階」の話や、一定程度の年齢になっていて、既に自分なりの文化を持っている子を受け入れる難しさとは何なのかなど、少し整理していただくとありがたいです。

坂口：まず里子は、**子どもが一人ポツンと入ってくる**というのがある。再婚家庭なら親子で入ることになるわけですが、里子の場合はひとりで、集団の中に入ってくるわけですよ。そこがさっきのお話の異文化交流、お互いに異文化っていうところがある。

それに里親は、里子の小さい頃のかわいい時期を知らない。里子が思春期に入って、何やかんや言っても、「あの頃はかわいかったわ」と振り返れるものがない。里子は、ブラックボックスみたいなもので、よりどころを探すのが難しい。

早樫：中途養育で里子を預かった場合、小さい頃の思い出がないという話が、とても新鮮で大事なポイントと思って聞いていた。「生意気なこと言っているけど、小さい頃こうやったやん」ということが、親のパワーになるのだなと思った。今の大変さが、マシになる。

ちょっと話がそれるかもしれないけど、家族面接では次回の相談までの間に「宿題」を出すことがあります。「ちょっとこういうことやってみませんか」とか、「こんなこと意識してくださいね」、「こんなことやってきてください」というような提案です。宿題を出す意図って、親をエンパワメントする、親を勇気づける種をまいていることになるのかなと思った。中途養育の場合、預かるまでの思い出や体験を共有したり、振り返ることができない、その種を見つけにくいから、それは大変だなと思った。

坂口：何が辛かったのかなとずっと思っていたんですけど、「次のこれしてみよう」というようなことがないのが辛かった。支援者の人も来てはくれる。「大変ですね」、「大丈

夫ですよ」とか言ってくれても、今の生活は何も変わらない。明日から私はどうしたらいい？というところだった。「次回までに、こういうことをしてみませんか」というような投げかけは、その家族の新たな一歩になる。そういうことが欲しかった。もちろん、やってみてどうなるかはわからないけど、何かを試してみたり、未来に向けて話そうよというようなことがなくて、辛さがどんどん膨らんでいったのかな。

ジェノグラムを利用した里親家族理解

早樫：ジェノグラムを使って、このジェノグラムからどんなことを思いついたり、発想したりするのだろうかとのディスカッションすることがある。中途養育を考えると、里親支援を考えるとという視点からも、ジェノグラムを使って考えてみるという方法があるなと思った。

千葉：そうですね。教材というか、残っていく形になると、気づいていくきっかけになりますよね。早樫さんが最初に言ってくれた「**里親家族の成長モデル**」の提示というか、そこを追求していく価値はすごくあるような気がして聞いていました。

大谷：「**里親家族の成長モデル**」を理解した上で、里親支援をしていけるようにするという感じですかね。

千葉：そうですね、それがないとケースバイケースですよみたいになる。それは少し乱暴ではないかと。ライフステージごとによく起こる課題になることがある。この時期にはこういうことに向き合うことがあるとか、時期ごとにあると思うので、それをまとめるだけでも十分役に立つのではないかと。

支援の土台作りとしての「家族面接」

大谷：最初的话题に戻りますが、今回の企画の出発点である坂口さんからの提案について教えてください。

坂口：支援者にも里親自身にも、家族の構造理論や家族システムを意識してもらうことが必要だと思う。その一つの取り組みとして「**里親認定前研修**」^{※4}があるので、そこで自分たちの家族を家族システムで見る、まだ見ぬ里子を家族の中に迎え入れたらどんな風になるかイメージしてもらうような取り組みが有効ではないかと思う。

里親家庭の中で問題が起きてから支援者が来るのではなく、最初から家族システムをイメージする土台を作っていく。その上で、マッチングの段階から、里子に焦点をあてて、子どもがどのような生い立ちか、どういう遍歴を経て目の前にいるのか一緒に考えていく。また、家族は別々の人間なので、里父と里母とであっても同じことを考えているという風にはならない。そこで第三者が介入することで、それぞれの思いを話し合える土壌を作っていく。これが、何かトラブルが起きた時に話し合いができる基盤になる。第三者が介入しての話し合いの場というのは、家族面接をイメージしている。これがザクっとした概要になります。

早樫：里親自身の育った家族（＝原家族）を話題にすることが、とっても大事と思う。里親登録申請の時点で、児童相談所が調査をする時にどれぐらい踏み込んで聞いている？

坂口：原家族については、聞かれるのは聞かれます。そこまで踏み込んで聞いていない印象です。調査の内容がいっぱいあるので、それをこなすだけでも時間がかかっていました。

アセスメント（査定）ではなく、理解と支援へ

千葉：書類がたくさんありますよね。

坂口：書類を作成していくという感じだった。どちらかという、実子に親の印象を聞く方が丁寧だったかな。子どもに「お母さんってどんな人？」とか聞いている。それもすごく時間が長いわけではないけど、そちらの方が関心はあるのかなとは思った。後は物理的な部屋確保とかで、原家族は書類上に書かれている内容ぐらい。

早樫：申請時に里親の原家族のことを聞いていても、調査項目として聞いているのか、家族理解という視点を持って掘り下げて深入りするかどうかは、ワーカーによる。「登録前研修」など認定前の作業の段階で、夫婦が互いの原家族についてどれぐらい理解をしていたり、それを踏まえて子育てにどんな風にプラスマイナスの影響やつながりがあるのかということまで想定して考えたりする姿勢があれば、調査ではなくてむしろ里親さんに対する理解と支援の入り口と感じていました。

そのことを里親認定前に対応できるということでも家族の視点が必要。だけど、それがまだ普及してないということだなあ。



千葉：もったいないです。原家族のことを掘り下げることに価値があると理解してもらえないか不安もあります。

大谷：里親研修の段階で里親家族の原家族を考えるとというようなことを聞くと、それきっかけで「私無理かも」という人もいたりするのでしょうか。だとすると、里親を広めたい立場からすると「それは困る」という気持ちがあったりもするのかなと思ったりします。一方で、里親家族の立場からすると、調査の時に原家族のことを聞かれると、応え方によって「あなたには任せられません」と言われるのではないかと思って、サポートするために聞いてもらっているというのではなくて査定されているというような心情で「不合格出されないようにしなきゃ」というそっちの気持ちが働くのかなということを思いました。現状はどうなんでしょう。

千葉：そういうところまで手が届いていないのかもしれませんが。起こったことを早く収めるとか、書類を揃えるとか、何か起こったことに対応することで精一杯のような印象があります。

坂口：そうですね、査定されるのではないかという感覚が先に出てきます。支援者にその意図がなくても、そう感じてしまいます。支援よりも先に評価されるのではないかという恐怖は、あります。

それこそ「子ども取られちゃうかも」と思ったら、しんどくても「うまくやっています」と言ってしまう、面接が終わってしまうというのはよく聞く話です。全ての所ではないですが、里親サロンも、児童相談所の人がいなくなってからが本当の始まりというようなことも聞きます。

大谷：決定権はもちろん行政側にあるから…。

坂口：そうですね、里子が委託されるかどうか児相の判断一つだし。さっきも話が出ていたけれど、援助者が書類作りに追われると声をかけにくくなるし、何か起こらないと対応しないせことになる、査定されている感覚が起こるし、私自身がモヤモヤしていたのはそういうところかなど。なので、家族の方が強くなれば、ちょっと変わるのではないかということはずごく思っていて、自分たちで家族の絡まったものをある程度ほぐせるようになる。そして、やっぱりほぐせないよねってなった時には、トラブルが起きる前から関係ができている支援者であれば、話しかけやすいと思う。

里親家庭を中心とした支援の輪を形成するために

坂口：里子と里親の相性というのものもあるけれど、そういうことも含めてどうやっていこうかというのが家族だから、先ほどの「子育ての器」の話とか、里子のブラックボックスで見えない部分、里子をかわいいと思えるところをどうみつけるかという方が大事かなと思う。

私も学校の先生も「この子素直じゃないよね」、「こういう時、こうするよね」と言いながら、それでも先生が「ここでもこういうことするから、お母さん大変だよ」って言ってくれている時は、すごく頑張れました。でも、学校の先生と家庭の意見が全く合わなくなってしまった時に、結局その真ん中にある里子の行動がおかしくなっていた。関わっている大人が足並み揃えて里子に関わっていけるとよいけれど、家ではダメと言われ学校では OK という状況になると里子が揺れて、どんどん試し行動みたいなものが出てくる。周りとの調和や歩調が合わないことが、私はとてもしんどかった。

早樫：学校を含めて対応にズレが生じた時に、その調整ってどうしていたのかな。そこに児童相談所や里親支援センターが入るといった感じ？

坂口：児童相談所が入っていました。ただ、それもスピーディにはできないので、時間が経つにつれ問題は増える。里子は楽な方に逃げていく感じになった。

千葉：本当に登場人物が多いですよ。家族だけでも多いのに、援助職である関係者を入れたら本当にたくさんになる。教科書的に言えば、里子や里親家庭を中心に同心円のよう
に支援の輪が広がるのがイメージされるかもしれませんが。でも里親支援はあちこち
にいくつも同心円があるというイメージです。難しいですよ。

里親支援全体を考える時は、エコマップを含めないと扱えないと実感します。エコ
マップで整理してみると、支援に繋がっていない人が見つかることもある。例えば、
里姉さんとか、里祖父母さんとか。ジェノグラムとエコマップを活用すると、そうい
う状況も明確になるかなあ。

大谷：状況をもう少し俯瞰的に見るということが必要ということですね。

早樫：俯瞰的に見るって、その通りだなと思う。俯瞰的に見る時に、エコマップで支援者が
共有できる。これはジェノグラムも同じで、まず状況を見える形にして、それぞれの
支援者が共通認識を持つことが重要です。逆に、現状ではその共有ができてなくて、
状況が俯瞰的に見えていない、つまりシステムとして見えていないのも大きな課題
だと思う。

もう一つは、誰がトータルにコントロールというか、采配をするのかという問題も
ある。措置している児相になると言えばそうかもしれないけれど、先ほどから話に出
ているように手続きの部分に手を取られて、十分に対応できていない状況もある。そ
ういう面では、里親支援というけども、まだまだ曖昧な部分があるということも言え
るのかな。

大谷：なるほど。ここまでのお話で、里親家族支援の課題や可能性について、とても理解が
深まりました。貴重な機会を頂き、ありがとうございました。次回からは、今回の内
容を受けて、①ジェノグラムから見た里親家族の理解、②求められる支援について、
より詳細に教えて頂きたいです。引き続きよろしく申し上げます。

【注釈】

※1 京都国際社会福祉センターは社会福祉法人京都国際社会福祉協力会を母体とし、1983
年から対人援助職の現任者向けの研修会を多数行っており、ジョン・D・シメオン氏に
よる家族療法の研修もそのひとつであった。対人援助学マガジン編集長の団士郎氏や、
本連載の登壇者早樫一男氏も講座を受講し、現在は両氏が家族療法に関する講座を引
き継いでいる。また、家族面接による相談も受け付けており、千葉晃央氏、坂口伊都氏
も相談員として関わっている。

※2 立命館大学（人間科学研究所社会的養育プロジェクト）が日本財団の助成を受け、社会
福祉、家族療法、心理臨床、社会病理などを統合した関連領域の知識と国内外の先進的
な理念や実践を学び、人間理解力を身につけた思慮深く行動力のあるフォスタリング
ソーシャルワーカーを養成することを目的としている。日本初のフォスタリング・ソー

シャルワーク専門職講座で、対面とオンライン、オンデマンド学習に加え、様々な「当事者」も登壇します。フォローアップ講座ではジェノグラム、エコマップを用いた事例検討を里親支援の現場の方々と重ねています。オーストラリアへのスタディツアーもあり、長年フォスタリング・ソーシャルワークを実践している現地で多くの学びを得ている。

- ※3 家族のあり方について、「パワー」「境界」「サブシステム」などの概念を用いて整理・理解する考え方。ジェノグラム等と併せて、家族理解や家族支援にとっても有用なツールである。次号以降で、実際のジェノグラムも用いながら活用の実際について述べる。
- ※4 里親認定前研修は、4日間行われ、座学が2日間、実習が2日間の日程で行われる。研修は、夫婦揃って受講する必要がある。その他、基礎研修がある。基礎研修は座学1日、実習1日程度と定められている。

【引用】

厚生労働省（2017） 新しい社会的養育ビジョン <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000173888.pdf>（2022年12月30日閲覧）